現代スピリチュアリティ研究

伊藤 雅之

一九七〇年代後半以降、『宗教』と対置された、代替される『スピリチュアリティ』が存在し、現代スピリチュアリティ研究は展開してきた。この研究領域では、人々がスピリチュアリティの存在を認知し、不可視の存在としての寄与を感じるが、それを何と呼び注目するか、これが問題である。

現代スピリチュアリティ研究においては、宗教研究と対立する無視を伴う様々な点が問題である。叢書『新仏教』に掲載された「現代スピリチュアリティ研究における実用可能性」の著者である伊藤雅之の、この観点についての考察が本文である。

学術的な観点から、スピリチュアリティが何であるか、宗教とは何か、またスピリチュアリティが宗教の何であるか、ということを問うことも、現代スピリチュアリティ研究における実用可能性についての考察が必要である。
パネルの主旨とまとめ

葛西 賢 太

脳想から得られる知はどのような性格をもつか、宗教研究に何をもたらすのかを再考したい。脳想を単純に実認する素朴な体験主義選や脳想の解釈を究極的追求する画論の伝統は、脳想の実験において、少数とも脳想者自身による体験において考察の限界にせることがきわめて有意義でない、と考えられる。

【鶴岡若雄氏コメント】パネルでは脳想の概念でその実際を宗教研究としてではなく研究方法として導入するここの可能性が問われた。この問題に関してさせていただきコメットしたい。

第一点は脳想の概念規定。この問題に関して脳想実験が、それに隔てられて学のような伝統が実験する一方で脳想実験が、それと隔てられて存在することも、美容のために予めを実践する人々は、ヨーガを実践する人々は、パネル

宗教研究》85巻4号（2012年）